

15.空振りと素振り

津波警報などがあっても、なかなか避難する人が少ないというようなことが言われます。その背景には、これまでの警報が当たらないとか、いわれるほどのことがなかったというようなことがあるようです。つまり、何回か空振りを経験しているということだと思います。最初は保険だと思っていても、そのうちオオカミ少年になって、本当の時には大変なことになるということは頭にはないようです。

しかし、災害を考えると、せつかくのこのような機会を空振りではなく、素振りと考えてみてはいかがでしょうか。草野球で、空振りは悔しいおもいになりますが、素振りは自分に自信を持たせるための準備でなんとなく次に期待するものがあります。2022年12月16日から運用される「北海道・三陸沖後発地震注意情報」に関する後発地震の対応について、京都大学防災研究所の矢守克也教授は、「後発地震が起こらなかった場合でも、国民一人一人がこれを空振りにとらえるのではなく、いつか巨大地震への備えの徹底や防災意識の向上につながる予行演習の素振りにとらえる」という考え方の重要性を示しています。確かに、打席に立つ前の素振りが大切なことがよくわかります。

自然災害に限らず、科学技術とはいえ、大小さまざまな空振りがつきものです。科学技術はすべてを解決してくれるものではないので、様々な素振りを繰り返して次の価値向上へと進んでいるのだと思います。失敗は開発のもと、失敗の経験が次へ生かされるということが言われもします。そんなに簡単に、解決できるほど相手は簡単ではありません。人間には約2万種の遺伝子があつて、その遺伝情報のすべてを意味するゲノム解析が進んで、構造の解明が進められたそうです。遺伝子・ゲノム解析の結果、ゲノムは生命の進化、生物間の差異、種の保存などのあらゆる生命現象の基本として位置づけられています。そして、植物は動物よりも複雑なゲノムを有していて、小麦などは人間の数倍規模のゲノムを持っているということで、小麦の方が人間よりも進歩しているような気がします。植物は移動せずに生存しなければならないという条件にあるから相当なものを備えているのだと思います。

ところで、新人類の人間は、この世に生まれてわずか20万年しか歴史がなく、ゲノムもほとんど変化しないで来ているのだそうです。そのために当初の設計された身体的機能や脳を何とか生かしながら、学習を重ねているのだそうです。人間は経験を重ねていく宿命にあるような気がします。一度の空振りにめげずに、素振りを重ねていかないと当たらないということで、それへの王道はないというのも科学技術の世界であろうと思います。完璧なものを夢見るのではなく、その不定性に気づいて対応することが賢明なことであり、継続したものになるということに気づかされます。